

一般社団法人日本社会福祉学会 第66回春季大会 報告

第5期全国大会運営委員長 原田 正樹（日本福祉大学）

大会テーマ：外国人への支援～多文化共生社会とソーシャルワーク～

開催日時：2018年5月27日（日）13:00～17:00

開催会場：東京通信大学新宿駅前キャンパス 21階 211教室

2018年5月27日に第66回春季大会が開催されました。

冒頭、午前中の総会で選出された新会長の金子光一氏より、開会挨拶がありました。

その後、2017年度学術賞受賞者講演として、岩田正美氏（元日本社会福祉学会会長・日本女子大学名誉教授）による「社会福祉のトポス—社会福祉の新たな解釈を求めて」と題した講演がありました。

岩田氏は受賞作である『社会福祉のトポス—社会福祉の新たな解釈を求めて』（有斐閣）を素材にして、本研究の発想、それに伴う準備、研究方法の選択、解釈と概念装置というプロセスを解説してくださいました。中央政府の行政報告（白書）を素材にして、それらを社会福祉の事業史として把握し、一般化形式と特殊化形式という概念装置を用いて整理し直すことで、「トポス」の諸相を読み解いていく過程は圧巻的でした。

続いて、「外国人への支援～多文化共生社会とソーシャルワーク～」と題したシンポジウムが行われました。シンポジストとして、三浦知人氏（社会福祉法人青丘社）、石河久美子氏（日本福祉大学）、朝倉美江氏（金城学院大学）、コメンテーターとして鍾家新氏（明治大学）、コーディネーターを加山弾氏（東洋大学）が務めました。

シンポジウムの企画趣旨として、「外国人の定住化が進むにしたがい、人々の孤立や不安定な雇用などの現代社会の課題は、日本に暮らす外国人を取り巻く生活状況に影響を及ぼしている。結婚や離婚、ドメスティック・バイオレンス問題、居住の不安定さ、子どもの教育、労働、経済的問題と課題は山積している。その際に多文化共生社会の実現にむけたソーシャルワークの実践から学ぶことは、地域共生社会のなかに外国人支援をどう位置づけていくのか、改めて社会福祉としての意味づけを行い、ソーシャルワークの新たな方向性を模索したい」とあります。

シンポジストとして、三浦氏からは在日の民族差別の実態とそれを乗り越えようとする取り組みについて、ご自身が関わってきた川崎市さくらもとの活動報告がありました。地域の有する排除と包摂、弱いものたちを中心にすえたまちづくりのあり方について、経験に基づいた力強いメッセージが発信されました。石河氏からは多文化ソーシャルワークの実践の現状と課題について、外国人移住者のニーズの多様化・複雑化・深刻化の実

態が報告され、多文化ソーシャルワークの枠組みと方法について提起がありました。とくにこれからの時代には多文化ソーシャルワークが一つの専門領域になるのではなく、児童・高齢者・地域福祉などすべての領域に多文化支援の視点が加わるのが重要だという指摘がありました。朝倉氏からは外国人労働者問題のなかで、「不安定定住」によるトランスナショナルな移住家族の問題と政策的な背景と施策の欠如を訴えました。そのうえで多文化生活支援システムの必要性にもとづく多文化共生地域福祉という問題提起がありました。

こうした報告を受けて、鍾氏は①日本の社会福祉における外国人問題の表と裏として、民族差別や生活問題の複雑化を指摘しました。また②日本の社会福祉における外国人問題の課題と対策として、関係性のとらえ方、言語・文化といったアイデンティティの問題、政策やサービスの課題をまとめ、そして③日本社会・現代社会の深層問題という視点から、外国人の問題そのものが多様化し複雑化しているなかで、一国の社会福祉制度だけでは解決が難しい現実などについてコメントがなされました。

加山氏による巧なコーディネートにより、この問題の本質や現状について共有され、企画趣旨にある新たな方向性について検討される機会となりました。まさにこれからの「外国人への支援」を考えるということは、私たち日本人、あるいは支援者側がどう変わるかが問われていることを確認させられたシンポジウムでした。